

# 人間とペット動物の関係性

——動物観の構造とその形成過程を探る——

The Relationship between Pet and human

: Searching for the Structure of Beliefs about animals and its formative process.

大西奈央

Nao ONISHI

(イオンリテール株式会社)

米澤好史

Yoshifumi YONEZAWA

(和歌山大学教育学部)

2008年10月1日受理

## 問題

従来、私たち人間と動物は密接な関係にある。人間と動物の歴史は、12,000年前のNatifianの遺跡からイヌと人間が共に埋葬されていた墓が見つかることから、古代にまでさかのぼる。そして現在、その関係は家畜としてのみならず、ペット動物の飼育や野生動物との触れ合いなど多種多様になってきている。「ヒトと動物の関係」を取り扱う分野への関心は1970年代から徐々に高まり、その中でも特に動物たちが人間にもたらす「癒し」や「安らぎ」等が近年注目されてきている。藤崎(2002)によれば、欧米の研究では、動物との触れ合いやその存在自体で精神状態が落ち着くことや、ペット動物の飼育が人間の生きる力を高めている等の「ペット効果」が知られている。日本でも、病院や老人ホーム等でペット動物との触れ合いが導入され、私たち人間にプラスの影響を与えてくれる存在として、動物との関係が肯定的に捉えられている。その一方で、非常識なペット動物の飼い方、動物虐待という言葉が飛び交い、私たち人間が動物にマイナスの影響を与えているというニュースも少なくない。さらには、環境破壊により絶滅の危機にさらされている動物の話題や、食べ物を求めて人の居住地域に現れ、人間に危害を加えてしまうという悪循環も起こっている。私たち人間は地球で生きる存在として、様々な動物と共生しており、共生は必要不可欠なことである。ゆえに人間と動物のどちらもがよりよく暮らすためには、人間が動物に対して与えているマイナスの影響を減らすことが必要とされる。では、どのようにすればお互いがプラスの影響を与え合えるのだろうか。

まず現代において最も身近な動物との触れ合いは、家庭で飼育されているペット動物である。ペット動物と人間の関係性に目を向けてみる。人間がペット動物との関わりの中で、その動物のことをどのように理解しているかどうかを調べることは重要である。Voith(1985)は人間がペット動物に愛着を抱くようになるのは、ペット動物が単なる家畜であることを認識しながらも、それがあたかも人間であるように感じてしまう

からだと述べている。つまり、動物に本当に心があるかという問題ではなく、人間が動物との関係の中で人間と通じる心の存在を動物の中に見出していると言い換えられる。人間が言葉の通じない存在に対して心の存在を見出していることは、次のことから言える。人間は他者の行動を、心を読み取ることによって理解しようとする特徴がある。例えば、人間の子どもは発達の早期から、養育者によって心を持った存在として扱われ、そのような養育者の解釈活動を通して乳児の欲求や要求は間主観的に把握されてゆくと言われている(麻生, 1992; 鯨岡, 1997)。つまり心の理解の発達とは社会的な心が織りなす関係の中で育つと捉えることができる。

心の理解の対象としては、これまで人による人の心の理解、動物、特に類人猿による人の心の理解、動物による動物の心の理解が問題として取り上げられてきた。そして人間と動物の関係に関心が高まってきた現在、人間が他の動物の心をどのように理解しているかに関しても注目が集まってきた。哺乳類から昆虫にいたる40種類の動物の「知能」、「痛覚」、「人間との関係」に対する一般大学生の評価に関する研究(吉田・川村, 1997)や、60種類の動物を対象に「知能」に対する一般学生の評定を求めた研究(中島, 1992)などである。また質問紙による、ペット動物に対する「心の理解」を調べたもの(藤崎, 2000)や、イヌとネコへの言葉かけの分析からペット動物の「心」をどう理解するか(藤崎, 2002)といった、ペット動物に関する研究もなされている。これらの調査では一般の人々が動物の「心」の存在を見出すことが明らかとなっている。一方で、動物の種類によって「心」の読み取りの区別を行ったり、心的機能の種類を制限したりしていることも示されている。上述より、人間が動物との関係を築くにあたっては、心の理解、つまり心の読み取りが重要な点となると考えられる。

人間の成長過程において、心の理解の発達が著しいとされるのは幼児期の子どもである。そこで動物の心の読み取りについて幼児期の子どもを対象とした研究

を見ていく。藤崎(2004)はウサギの飼育経験とその心的機能の理解について幼稚園児を対象として研究を行っている。この研究で、ウサギの生態に沿う文脈で生起する知覚、感情、欲求、信念については、多くの子どもたちが存在を認めているが、擬人化の高い反応は加齢に伴い減少しており、またウサギとの関わりの多い幼児は生物学的知識を豊富に有していたが擬人化が増えることがわかった。さらに大西(2006)では、3・5・7才児を対象にイヌに対しての心の読み取りを調査した。結果、絵に描かれたある場面に登場する子どもとイヌは、同じ場面に遭遇するとき同じ気持ちを持つという回答が加齢と共に多くなっていた。よって加齢とともに自分の気持ちを動物にも映していることがわかった。以上の二つの研究では、異なった結果が示されており、幼児期の加齢に伴う変化は明確ではない。さらに擬人化についても疑問が残る。

では、大人はどうだろうか。藤崎・倉田・麻生(2007)によると、大人でもパソコンに話しかけたり(Reeves&Nass, 1998/2001)、人形を生きているかのように扱ったりする(麻生, 2000)とある。また、大人はロボットを生き物と勘違いしているわけではなく、単に知識が乏しいわけでもない。ロボットをロボットとして認識しつつも、そこに「こころ」を見る。そして想像上の対象にも「こころ」を見いだす能力を高度に発達させてきたといえるだろう、と述べている。これはまさに動物に対しても同じことが言えるのではないだろうか。

ペット動物を人間であるように感じてしまうこと、これは擬人化である。山田(1998)は擬人化と行動生態学の関係の中で、擬人化とは動物と人の表出された行動の類似性から、動物が人と同様の目的、意図、感情を共有していると見なすことであり、人の行動原理によって動物の行動を説明しようとする試みである。擬人化には、人が自分の持っている目的や意図、感情を動物に投影する働きが反映されている、と述べている。よって人間は身近な存在であるペット動物に対して、場を共有する際に行動の類似性を捉え、自らの心を映していることがあるのである。

以上より、人間と動物がよりよく共生するためには、人間と動物の関係性、特に人間の動物に対する行動や観点について知ることが重要だと考える。先述したように、現代において一般的に身近な存在である動物はペット動物である。そこで本研究では人間との関わりの強いペット動物に注目する。人間とペット動物の関係性を明らかにすることで、よりよい共生に少しでも繋がるのではないだろうか。よって本研究の目的は、人間はペット動物をどのように解釈し、どのような関係性で捉えているのかを探ることとする。また、それはどのような影響を受けたものであるのかという形成過程を、経験や環境などの要因を加えて検討する。さ

らには関係性の一つである擬人化への影響も探る。

## 研究1

### 目的

ペット動物と人間の間接関係を探る入り口として、ペット動物に対して人間はどのような視点を持ち、どのような存在として捉えているのかを知ることは重要である。人間はペット動物に直接目を向け、ペット動物の特性や能力を把握し、さらに自分の観点を加えて想定している。各々の観点が加わることでペット動物に対する捉え方は様々になる。そこで、人間がペット動物に対してどのような感情を想定し、どのような行動を起こすのかを知ることで、人間が感じているペット動物との関係性の在り方を知ることが出来るのではないかと考えた。例えば、飼い主による異常なほどの愛情は、ペット動物を自らの子どものように捉えていることによって発生していることがある。また、同等の立場と捉え、友だちのような存在だと感じていることもある。それとは反対に、ペット動物に対して否定的な印象を抱き、ペット動物を下等視する人もいるだろう。物やおもちゃの様に扱う人もいるだろう。動物学的な知識を持つ人はペット動物を人間とは区別し、単に一種の動物という存在の位置づけをするかもしれない。

これらを踏まえ、研究1では人間が考えるペット動物が持つ能力の種類と関係性を調査する。ペット動物との関係性については、仮説として「子ども」、「友だち」、「動物」、「おもちゃ」の4種類に分かれると考えた。総じて、人間のペット動物に対するイメージやペット動物との関係性の種類を「動物観」とし、検証する。

### 方法

#### 対象者

和歌山大学・大学院に在籍する大学生・大学院生347名(男性203名、女性144名)を対象とした。

#### 調査時期

2007年12月

#### 調査内容

〈動物観の測定〉

人間はペット動物についてどのように理解し、どのような存在として捉えているのかを測定するため、ペット動物との関係性やペット動物の解釈について、質問項目を作成した。ペット動物との関係性は、榎本(2003)の友人に対する感情の質問紙【信頼・安定】や杉浦(2000)の親和動機尺度【親和傾向】、酒井(私信)の親子間の信頼感に関する尺度【親用】、岸本(2001)の動物に対する愛着尺度を参考に、ペット動物に対比させ独自に項目を作成した。ペット動物の解釈は、藤崎(2000)の動物にどのような内的状態があるのかという形成過程を、経験や環境などの要因を加えて検討する。さ

信念]、情動的な巻き込まれに関する質問、物理的な人格化に関する質問を、Bartsch, & Wellman(1995)の心の理論の発達過程とLewis(1993)の生後3年間における子どもの情動の発達過程と照らし合わせながら作成した。さらに、恋人視、無生物視や下等生物視の性質を持つ項目を加えた。教示は「ペット動物に関する質問です。あなたの考えにあてはまるところに○をつけてください。※あなたが飼っている特定のペット動物にはあてはめないでください。」とし、評定は、「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらともいえない」「どちらかというと思わない」「そう思わない」の5件法で求めた。

手続き

講義の時間に集団式に質問紙を配布し、実施した。回答は被験者ペースで自由に行った。

結果

動物観尺度79項目で主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。主成分分析による固有値の変動に注目しながら、初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから6因子を抽出した。因子負荷量が.30以上の項目をその尺度項目とした。ただし、二つ以上の因子に.30以上の因子負荷がある場合はその項目を除外した。

第1因子は、「私は、ペット動物のためなら何でもする」、「私は、ペット動物と行動を共にしたい」などの15項目が負荷しており、【親密・一体感】と命名した。第2因子は、「ペット動物は、恥ずかしいという気持ちがある」、「ペット動物は、悪いことをした時に罪の意識を持つ」などの15項目が負荷しており、【高等感情機能】と命名した。第3因子は、「私は、ペット動物と一緒にいると落ち着く」、「私は、ペット動物をかわいいと思う」などの7項目が負荷しており、【仲間感・依存感】と命名した。第4因子は、「ペット動物は、嫌なことをされると怒る」、「ペット動物は、人の声や物音が聞こえる」、「ペット動物は、人に遊んで欲しがらる」などの13項目が負荷しており、【感覚・原始感情・欲求機能】と命名した。第5因子は、「ペット動物は、人と一緒にいたくない(逆転項目)」、「私は、ペット動物は人に飼われるより野生で自由に暮らす方が幸せだと思う(逆転項目)」などの6項目が負荷しており、【飼育必要性】と命名した。第6因子は、「私は、ペット動物は動くおもちゃだと思う」、「ペット動物は、人より下等な生物だ」などの6項目が負荷しており、【下等生物・物体視】と命名した。なお、 $\alpha$ 係数は第1因子より順に、.908、.860、.941、.778、.635、.548であった。

考察

まず、目的の一つである解釈については、第2因子の【高等感情機能】と第4因子の【感覚・原始感情・欲求機能】の2つの因子が抽出された。第4因子には

藤崎(2000)の基本的感情、欲求を参考にした項目が多く負荷した。また、「ペット動物は、人の声や物音が聞こえる」という生理・感覚的な項目などが負荷した。それに対し、第2因子では藤崎(2000)の社会的感情が多く負荷した。また、「ペット動物は、人に話しかける」、「ペット動物は、考えて行動する」など、ペット動物の能動的な行動、コミュニケーション能力を含む項目が負荷した。以上に加え、第2因子の「ペット動物は、人と同等に感情を持っている」と第4因子の「ペット動物は一切感情を持たない(逆転項目)」を比較し、第2因子と第4因子はペット動物を解釈する上で、感情のレベルが対比する因子とした。

二つ目に、ペット動物との関係性については、第1因子の【親密・一体感】、第3因子の【仲間感・依存感】、第5因子の【飼育必要性】、第6因子の【下等生物・物体視】の4つに分類された。第1因子と第3因子には、ペット動物を肯定的に見る項目が多く負荷していた。第1因子には、「私はペット動物を恋人のよう

Table 1 動物観の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	共通性
66 私は、ペット動物のためなら何でもする。	.823	-.061	-.121	-.047	-.047	.065	.518
76 私は、ペット動物と行動を共にしたい。	-.808	-.165	-.008	.159	-.086	-.068	.578
67 私は、ペット動物がいないと生きていけない。	.743	-.061	-.121	-.237	-.170	-.053	.429
42 私は、ペット動物がいれば他には何もいらぬと思ふ。	.721	-.016	-.121	-.277	.035	.111	.478
75 私は、ペット動物のことならなんでも許せる。	.702	-.156	-.035	-.174	.014	.063	.378
78 私は、ペット動物を恋人のようだと思う。	.699	.063	-.091	-.083	-.092	.053	.444
47 私は、ペット動物を親友のようだと思う。	.654	.065	.050	-.174	-.238	-.143	.494
41 私は、人といふよりはペット動物と一緒にいたい。	.651	.026	-.045	-.206	.041	.091	.354
41 私は、ペット動物を自分の子どもと思う。	.604	.050	.076	.025	-.061	.139	.494
20 私は、ペット動物と喜びや悲しみを共有したい。	.577	.230	.005	.096	-.118	-.056	.550
32 私は、ペット動物をきょうだいと思う。	.540	.114	.130	-.113	.068	-.026	.448
30 私は、ペット動物を独占したい。	.523	-.137	.138	.025	-.028	.297	.424
37 私は、ペット動物の考えていることがたいわい。	.493	.028	.081	-.100	.300	.161	.482
74 私は、ペット動物を信頼している。	.456	.115	.217	.008	.029	-.143	.494
52 私は、ペット動物と心が通じ合うと思ふ。	.443	.232	.016	.246	-.043	-.013	.544
13 ペット動物は、恥ずかしいという気持ちがある。	-.258	.877	.007	-.186	.009	-.019	.458
17 ペット動物は、悪いことをした時に罪の意識を持つ。	-.200	.676	.032	.026	.251	.023	.512
20 ペット動物は、将来について考える。	-.165	.622	-.081	-.158	-.201	-.060	.397
50 ペット動物は、からかうとすることがある。	-.098	.611	.155	-.097	-.204	-.093	.313
10 ペット動物は、かわいそうなお話を聞くと悲しむ。	.014	.601	-.021	-.144	.068	.011	.324
35 ペット動物は、失敗するのを恐る。	.061	.583	-.038	.075	-.110	-.039	.374
14 ペット動物は、飼い主に同情してくれる。	-.081	.571	.117	-.020	.157	.107	.399
44 ペット動物は、嘘をつく。	-.043	.569	.000	-.255	-.223	-.059	.264
1 ペット動物は、臆いまい時に飼い主のことを考える。	-.063	.532	.105	-.010	.095	.109	.331
73 ペット動物は、誇りを持っている。	.133	.525	-.002	.041	-.135	-.198	.388
54 ペット動物は、人に話しかける。	.266	.401	-.070	.095	.095	-.091	.419
34 ペット動物は、夢を見て行動する。	.106	.390	.003	.179	-.074	-.232	.361
34 ペット動物は、人と同等に感情を持っている。	.208	.388	.097	.138	-.073	.036	.415
24 ペット動物は、えさをもらうと感謝する。	.021	.337	-.058	.169	-.025	.073	.314
57 ペット動物は、夢を見る。	.072	.314	.012	.237	.039	-.038	.298
36 私は、ペット動物と一緒にいると落ち着く。	.059	-.014	.866	-.074	.026	-.073	.764
60 私は、ペット動物をかわいいと思ふ。	-.126	.047	.840	.038	.046	.070	.677
79 私は、ペット動物が大好きだ。	.129	.024	.798	-.116	.115	-.029	.767
15 私は、ペット動物と遊びたい。	.033	.127	.794	-.047	.009	.021	.707
40 私は、ペット動物と一緒にいると幸せだ。	.111	.010	.794	-.013	.087	.049	.808
74 私は、ペット動物といると癒される。	-.059	.040	.753	.067	.046	.012	.636
9 私は、ペット動物が近寄ってきてくれると嬉しい。	-.042	.037	.700	.156	.021	.024	.645
27 ペット動物は、嫌なことをされると怒る。	-.158	.071	.002	.651	-.103	.032	.355
45 ペット動物は、人の声や物音が聞こえる。	-.069	.041	.065	.625	.006	.108	.364
29 ペット動物は、嫌いな相手を嫌悪する。	-.085	-.176	.014	.585	-.180	.027	.338
62 ペット動物は、背後や側面から話すと驚く。	-.048	.046	-.016	.580	-.049	.021	.297
30 ペット動物は、一切感情を持たない。	.116	-.038	.043	.516	-.164	.270	.564
11 ペット動物は、ほめられると喜ぶ。	-.008	.222	-.024	.507	.091	.060	.430
72 ペット動物は、人に遊んで欲しがらる。	.057	-.085	-.010	.481	.179	.174	.288
64 ペット動物は、意志を持っている。	.164	.202	-.065	.454	-.029	-.280	.514
56 ペット動物は、息をする。	-.075	-.168	.043	.434	-.066	-.058	.166
12 ペット動物は、夕御飯のことを考える。	-.141	.291	.014	.389	-.091	.214	.245
31 ペット動物は、地獄がくると恐れる。	.011	.142	-.195	.383	-.059	.079	.126
63 ペット動物は、石を食べられないことを知っている。	-.079	-.256	-.017	.352	.034	.100	.091
26 ペット動物は、狭い箱から出たがる。	-.159	.253	.073	.338	-.290	.180	.202
71 ペット動物は人と一緒にいたくない。	.083	.026	-.087	-.015	-.538	.069	.332
56 私は、ペット動物に話しかけるのが好きだと思ふ。	.060	.033	-.114	.104	-.471	-.071	.205
2 ペット動物は人を十分受け入れている。	.046	.292	-.048	.073	.434	.169	.393
48 私は、ペット動物の行動の予測ができない。	-.139	.031	.034	.033	-.425	.090	.209
23 私は、ペット動物の死で涙を流すのが嫌いだと思ふ。	.099	.057	.271	.180	-.383	.157	.223
46 私は、ペット動物に十分受け入れられていると思ふ。	.255	.030	.208	.028	.320	.123	.412
59 私は、ペット動物を動くおもちゃのようだと思う。	.131	-.054	-.051	-.084	-.057	.553	.398
8 私は、ペット動物をぬいごみのようだと感じる。	-.071	-.010	.192	.108	-.027	.546	.339
69 ペット動物は、人より下等な生物だ。	-.110	-.135	.156	.111	.071	.508	.388
65 私は、ペット動物はエサをあげればよいと思ふ。	.008	.245	-.170	-.192	-.097	.345	.305
43 私は、ペット動物に物を投げつけてはいけないと思ふ。	-.286	-.044	-.044	.197	.018	.330	.220
48 私は、ペット動物は人が世話をしなれれば生きていけない。	.082	.129	.042	.552	.275	.311	.166
28 私は、ペット動物といつとも一緒にいたい。	.473	-.129	.447	.087	-.024	.077	.643
77 私は、ペット動物に自分の考えていることを伝えたい。	.461	-.057	.084	.328	-.113	.079	.414
53 私は、ペット動物のために世話をすることが大好きだ。	.436	.009	.424	-.064	-.015	-.060	.535
38 私は、ペット動物と非常に親密になりたい。	.432	-.073	.404	.128	-.039	.075	.592
19 ペット動物は、人とは異なる生物だ。	-.252	.131	-.002	.106	-.211	.154	.181
18 ペット動物は、人の気持ちをわかっている。	.088	.462	-.071	.493	-.068	.369	.521
41 ペット動物は、新しいおもちゃを欲しがらる。	-.031	.281	.082	.140	-.170	.166	.148
5 ペット動物は、飼い主がいなくなるのを嫌うと思ふ。	-.171	.253	-.059	.216	.124	.116	.290
62 私は、ペット動物は命ある存在なので、大事にしようと思ふ。	-.045	-.062	.424	.304	-.037	-.170	.434
6 私は、ペット動物には悪いところがないと思ふ。	.189	-.122	.225	-.064	.010	.079	.101
3 ペット動物は、生きている。	.009	.103	.166	.134	.067	-.132	.176
33 ペット動物は、たたくても痛みを感じない。	.017	.298	.096	-.535	-.054	.373	.469
58 私は、ペット動物に物を投げつけてはいけないと思ふ。	-.181	.184	-.077	.493	-.068	.369	.525
18 私は、ペット動物が私を見てくれるのが好きだと思ふ。	-.146	.010	.369	.397	.002	-.087	.431
16 ペット動物は、飼い主の愛情を感じている。	.061	.189	-.003	.328	.329	.060	.463
21 私は、ペット動物の考えていることがわからないで不安だ。	.139	.185	-.012	-.009	-.210	.167	.133
22 ペット動物は、本能だけで動いている。	.001	-.212	.096	-.120	-.231	.254	.248
固有値	13.37	10.78	13.04	11.28	6.04	3.56	
寄与率(%)	21.94	7.18	4.79	2.17	2.08	1.58	39.74



だと思う」を始め、親友、自分の子ども、きょうだいだと感じている項目が一つの因子に集まった。さらにペット動物のことを深く考え、自分と近い存在として捉えている項目が多くあった。それに比べ第3因子には、表面的な感情であり、仲間という安心感を含む項目が多くあった。これより第1因子と第3因子は関係性の深さの差で対比する因子とした。また、第5因子はペット動物を人間の必要性に関して野生動物と区別している項目が多く負荷し、第6因子はペット動物を軽視している項目を含んでいた。よって、第5因子ではペット動物を飼育が必要な生物として人間と区別しており、第6因子はより軽視した下等生物や、いわゆる無生物なものとして捉えていた。

仮説で予想した4種類の関係性のうち、第5因子では飼育の必要性を見出しており、人間とは区別した生き物として捉えていることから、「動物」という位置づけが行われていた。また、第6因子ではペット動物が無生物であるとは断定できないが、少なくとも動くおもちゃやぬいぐるみのように捉えていることがわかった。しかし、第1因子には「子ども」と「友だち」の二つの要素が含まれていた。以上より、仮説は一部支持されたと言える。

ここで、関係性の一つである「擬人化」について考える。今回の動物観測定で抽出された6因子の中で、擬人化に関連しているのは、能力の解釈でコミュニケーション能力を含んだ高等感情機能、関係性でより内面的なつながりが強い親密・一体感である。仲間・依存感に関しては、仲間意識が自分との関係規定に過ぎないため、上記の二つの因子を擬人化の指標として捉えることにする。

## 研究2

### 目的

研究1より、人間のペット動物を見る視点は、親密・一体感、高等感情機能、仲間感・依存感、感覚・原始感情・欲求機能、飼育必要性、下等生物・物体視の6つの動物観であることがわかった。では、この6つの動物観はどのようにしてつくられているのだろうか。人間が動物と全く関わらずに生活することはほとんどない。しかし、動物との触れ合いや動物への関心の程度は人によって様々である。動物との経験が豊富な人や、直接的な触れ合いの少ない人もいれば、動物に対して良い印象のみを抱く人や、動物学的な知識を持ち接する人もいるだろう。動物に関わる経験が動物観に何らかの影響を及ぼしていることは十分に考えられる。また、動物との触れ合いの程度は環境によって大きく左右される。例えば、自宅や近所でペット動物の飼育ができない状況であれば直接的な接触は少なくなる。そこで動物との直接的な接触経験と環境は区別して考

える必要がある。加えて、動物観に影響を及ぼしていると考えられるのは、各自の性格特性である。今回は幅広い性格検査の中でも対人関係に着目して取り上げたい。特に対人関係に不安を抱きやすい、孤独の感じやすさや信頼の感じ方など、人間関係のマイナスイメージが動物に対して何かを映す要因になっているのではないかと考える。

こうした考えを基に、研究2では以下の仮説を立てた。

仮説1) 動物との関わり経験が少ない人ほど、動物を擬人化しやすいのではないかと。

仮説2) 環境の差が動物観に影響を及ぼしているのではないかと。

仮説3) 対人関係にマイナスイメージを持つ人ほど、動物を擬人化し、動物を人間の代替としていないのではないかと。

## 方法

### 対象者

和歌山大学・大学院に在籍する大学生・大学院生347名(男性203名、女性144名)を対象とした。

### 調査時期

2007年12月

### 調査内容

〈動物観の測定〉

動物観については、研究1で測定したものをそのまま用いた。

〈環境の測定〉

環境の違いが動物観に与える影響を知るため、環境についての質問項目を作成した。人と動物の直接的な関わりを除き、家や学校の環境についての17項目に、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。指示は「次の質問について、「はい」か「いいえ」のどちらかあてはまる方に○をつけてください。※ここでの「動物」は一般的な動物を指します。ペット動物とは限りません。」とした。

〈現在と過去の経験の測定〉

動物やペット動物に関する事項への直接的な関わり頻度を調べるため、経験についての質問項目を作成した。対象者を大学生としたため、環境の変化の有無を考え、現在と過去に分けて回答を求めた。過去は高校生以前のことにした。指示は「あなたの経験について質問します。次の質問に対して、現在と過去について、それぞれあてはまる場所に○をつけてください。(過去は高校生以前のことにします。)※「動物」は一般的な動物を指します。※「ペット動物」はあなたが知っている範囲で、実際にペットとして飼われている、または飼われていた動物を指します。(あなたのペット動物でなくても構いません。知人が飼っている動物等も含まれます。)」とした。1つの項目に対し、現在と過去のそれぞれについて、「よくある」「たまにある」「あ

まりない」「全くない」の4件法で回答を求めた。

〈性格検査(攻撃性・共感性・非協調性・自己顕示性)の測定〉

柳井・柏木・国生(1987)が作成した新性格検査より、【攻撃性】【共感性】【非協調性】【自己顕示性】の各10項目を使用した。各項目、「はい」「どちらかというとはい」「どちらともいえない」「どちらかというといいえ」「いいえ」の5段階で評定を求めた。

〈対人不安傾向の測定〉

松尾・新井(1998)が作成した対人不安傾向尺度を用いた。項目は、【否定的評価懸念】7項目、【情動的反応性】6項目、【対人関与の苦痛】5項目であり、各項目「はい」から「いいえ」の5段階で評定を求めた。

〈孤独感の測定〉

落合(1983)が作成した孤独感尺度を用いた。項目は、【共感可能性】9項目、【個別性への気づき】7項目であり、各項目「はい」から「いいえ」の5段階で評定を求めた。

〈信頼感の測定〉

天貝(1995)が作成した信頼感尺度を用いた。項目は、【自分への信頼】6項目、【他人への信頼】8項目【不信】10項目であり、各項目「はい」から「いいえ」の5段階で評定を求めた。

手続き

講義の時間に集団的に質問紙を配布し、実施した。被験者ペースで自由に回答した。

結果

(1)各尺度の因子分析と信頼性

それぞれの尺度ごとに主因子法による因子分析を行った。主成分分析による固有値の変動に注目しながら、初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから因子数を決定した。

〈経験(現在)〉

経験(現在)に関する30項目で、プロマックス回転による因子分析を行い、4因子を抽出した(Table 2)。因子負荷量が.30以上の項目をその尺度項目とした。ただし、二つ以上の因子に.30以上の因子負荷がある場合はその項目を除外した。

第1因子は、「ペット動物のトイレの処理をすること」、「ペット動物を自慢すること」などの13項目が負荷しており、【世話・深い関与】と命名した。第2因子は、「動物に、人と話すように言葉をかけること」、「動物に近づいたり、触ったりすること」などの7項目が負荷しており、【会話・意識】と命名した。第3因子は、「動物図鑑や動物の写真集を見ること」、「動物園へ行くこと」などの5項目が負荷しており、【観察】と命名した。第4因子は、「ペット動物に本を読み聞かせること」、「ペット動物が他の人にかわいがられるのを許せないこと」などの3項目が負荷しており、【独占】と

Table 2 経験(現在)の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
23 ペット動物のトイレの処理をすること。	.959	-.133	.010	-.044	.730
8 ペット動物に水をあげること。	.950	-.018	.010	-.221	.754
2 ペット動物にご褒美としてえさをあげること。	.944	-.092	-.020	-.096	.695
18 ペット動物にえさをあげること。	.922	-.009	-.083	-.187	.794
11 ペット動物にほめ言葉をかけること。	.691	.272	-.006	-.037	.789
22 動物に指示や命令をすること(待て、来い等)。	.644	.143	.021	-.074	.540
15 ペット動物を自慢すること。	.603	.090	-.004	.139	.548
5 ペット動物が私の気持ちをわかってくれると感じること。	.596	.229	-.101	.014	.549
29 ペット動物の誕生日を祝うこと。	.555	-.119	.164	.265	.520
24 ペット動物ととても似ていると感じること。	.546	.157	-.032	.179	.560
14 ペット動物の元気がないと、自分も元気がなくなること。	.537	.235	-.084	.115	.555
16 ペット動物が私に対して話しかけてくれること。	.515	.150	-.079	.282	.583
1 ペット動物と一緒に布団で寝ること。	.476	-.005	.042	.163	.340
20 動物に、人と話すように言葉をかけること。	-.053	.897	-.044	.157	.816
12 返事は期待せずに、動物に言葉をかけること。	.071	.803	.014	.017	.754
6 動物と会話すること。	.149	.676	-.051	.100	.656
7 動物に近づいたり、触ったりすること。	.189	.646	.108	-.260	.621
19 動物がいるのを見つけると、様子が気になること。	-.029	.554	.269	-.135	.430
27 動物の鳴き声に反応して返事すること。	.280	.512	-.052	.125	.600
26 実際の動物を見ること。	.022	.496	.139	-.277	.508
28 動物図鑑や動物の写真集を見ること。	-.129	.170	.686	.067	.519
9 テレビで動物の番組を見ること。	-.005	.189	.514	-.211	.356
3 動物園へ行くこと。	-.047	.047	.508	.158	.311
25 動物の出生場面を見ること。	.091	-.188	.400	.368	.331
30 ペット動物を目当てに、知人の家に行くこと。	.048	.119	.379	.273	.369
17 動物が死ぬ場面を見ること。	.203	-.064	.355	.036	.212
10 ペット動物に本を読み聞かせること。	.016	-.119	.200	.580	.382
4 ペット動物が他の人にかわいがられるのを許せないこと。	.222	-.060	.129	.402	.316
21 動物をロボットやぬいぐるみのように扱うこと。	.063	.199	-.056	.379	.257
13 動物が嫌だと感じること。	-.086	-.016	-.035	.194	.033
固有値	10.92	9.04	4.47	3.74	
寄与率(%)	39.13	4.69	4.02	2.92	50.76

命名した。なお、 $\alpha$ 係数は第1因子が.944、第2因子が.889、第3因子が.679、第4因子が.515であった。

〈経験(過去)〉

経験(過去)に関する30項目で、プロマックス回転による因子分析を行い、4因子抽出した(Table 3)。因子負荷量が.30以上の項目をその尺度項目とした。ただし、二つ以上の因子に.30以上の因子負荷がある場合はその項目を除外した。

第1因子は、「動物に、人と話すように言葉をかけること」、「ペット動物が私の気持ちをわかってくれると感じること」などの11項目が負荷し、【会話・深い関与】と命名した。第2因子は、「ペット動物に水をあげること」、「ペット動物にえさをあげること」などの4項目が負荷し、【世話】と命名した。第3因子は、「テレビで動物の番組を見ること」、「動物図鑑や動物の写真集を見ること」などの6項目が負荷し、【観察】と命名した。第4因子は、「ペット動物に本を読み聞かせること」、「ペット動物が他の人にかわいがられるのを許せないこと」などの4項目が負荷し、【独占】と命名した。なお、 $\alpha$ 係数は、第1因子が.918、第2因子が.872、第3因子が.666、第4因子が.602であった。

Table 3 経験(過去)の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
20 動物に、人と話すように言葉をかけること。	.895	-.088	-.008	-.043	.666
12 返事は期待せずに、動物に言葉をかけること。	.851	-.105	.105	-.046	.668
6 動物と会話すること。	.836	-.099	.023	-.015	.600
27 動物の鳴き声に反応して返事すること。	.754	-.031	-.023	.076	.570
21 動物が私の気持ちをわかってくれると感じること。	.747	.083	-.083	.011	.602
5 ペット動物にほめ言葉をかけること。	.719	.167	.032	-.028	.724
16 ペット動物が私に対して話しかけてくれること。	.708	-.114	-.167	.252	.522
24 ペット動物ととても似ていると感じること。	.564	.044	-.054	.278	.530
14 ペット動物の元気がないと、自分も元気がなくなること。	.537	.056	.030	.121	.419
15 ペット動物を自慢すること。	.377	.263	.044	.288	.582
26 実際の動物を見ること。	.351	.059	.198	-.296	.265
18 ペット動物にえさをあげること。	.012	.931	-.042	-.076	.819
23 ペット動物のトイレの処理をすること。	-.027	.809	.114	-.016	.717
2 ペット動物にご褒美としてえさをあげること。	.009	.700	.009	.151	.578
9 テレビで動物の番組を見ること。	.281	.559	-.105	.056	.669
28 動物図鑑や動物の写真集を見ること。	.102	.004	.641	-.112	.482
3 動物園へ行くこと。	-.008	-.078	.632	.151	.380
25 動物の出生場面を見ること。	-.146	-.043	.530	.112	.253
30 ペット動物を目当てに、知人の家に行くこと。	.146	.077	.417	.216	.283
17 動物が死ぬ場面を見ること。	-.229	.250	.415	.154	.239
10 ペット動物に本を読み聞かせること。	.075	-.140	.306	.235	.144
4 ペット動物が他の人にかわいがられるのを許せないこと。	-.106	-.063	.094	.679	.410
21 動物をロボットやぬいぐるみのように扱うこと。	-.057	.070	.165	.555	.342
1 動物と一緒に布団で寝ること。	.176	.104	.024	.366	.276
29 ペット動物の誕生日を祝うこと。	.261	.177	-.083	.336	.342
22 動物に指示や命令をすること(待て、来い等)。	.477	.314	-.095	.326	.452
19 動物がいるのを見つけると、様子が気になること。	.385	.095	.373	-.065	.493
7 動物に近づいたり、触ったりすること。	.379	.327	.164	-.247	.598
13 動物が嫌だと感じること。	-.264	-.088	.055	.244	.096
21 動物をロボットやぬいぐるみのように扱うこと。	.108	-.036	.049	.278	.110
固有値	9.27	7.31	4.20	3.15	
寄与率(%)	33.13	5.25	4.05	3.04	45.47

〈性格検査(自己顕示性・共感性・非協調性・攻撃性)〉

性格検査(自己顕示性・共感性・非協調性・攻撃性)の40項目で、プロマックス回転による因子分析を行い、元の尺度の解釈と照らし合わせて4因子を抽出した。因子負荷量が.40以上の項目をその尺度項目とした。

第1因子は、元の尺度の自己顕示性の10項目中9項目が負荷したため、【自己顕示性】、第2因子は、元の尺度の共感性の10項目中8項目が負荷したため、【共感性】、第3因子は、元の尺度の非協調性の10項目中8項目が負荷したため、【非協調性】、第4因子は、元の尺度の攻撃性の10項目中5項目が負荷したため、【攻撃性】とした。なお、 $\alpha$ 係数は、順に.858、.812、.746、.706であった。

〈対人不安傾向尺度〉

対人不安傾向尺度18項目で、プロマックス回転による因子分析を行い、元の尺度と照らし合わせて3因子を抽出した。因子負荷量が.40以上の項目をその尺度項目とした。

第1因子、第2因子、第3因子のそれぞれが、元の尺度の項目とほぼ一致したため、順に【否定的評価懸念】、【情動的反応性】、【対人関与の苦痛】とした。なお、 $\alpha$ 係数は、順に.827、.813、.768であった。

〈孤独感尺度〉

孤独感尺度16項目で、プロマックス回転による因子分析を行い、2因子を抽出した。因子負荷量が.40以上の項目をその尺度項目とした。

第1因子、第2因子共に、元の尺度の項目と一致したため、順に【共感可能性】、【個別性への気づき】とした。なお、 $\alpha$ 係数は、順に.855、.734であった。

〈信頼感〉

信頼感尺度24項目で、プロマックス回転による因子分析を行い、3因子を抽出した。因子負荷量が.40以上の項目をその尺度項目とした。

第1因子、第2因子、第3因子のそれぞれが、元の尺度の項目とほぼ一致したため、順に【他人への信頼】、【自分への信頼】、【不信】とした。項目「私は、今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものだと思う」は、元の尺度では不信に位置づけられているが、他人への信頼の逆転項目としても解釈できると判断したため、第1因子とした。項目「私は、多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う」、項目「私は、周りのほとんどの人は私を信頼してくれていると思う」は、元の尺度では他人への信頼に位置づけられているが、どちらにおいても他人からの評価を自分への信頼の指標としていると判断したため、第2因子とした。なお、 $\alpha$ 係数は、順に.783、.792、.771であった。

(2)相関分析

動物観、経験(現在・過去)、性格検査、対人不安傾向

向、孤独感、信頼感の下位尺度得点間の相関を行った。

動物観6因子間の相関は、高等感情機能、仲間感・依存感、感覚・原始感情・欲求機能、飼育必要性と下等生物間では、相関が見られなかったが、上述以外のすべての因子間では有意な正の相関が見られた。動物観6因子と経験(現在・過去)8因子の相関は、Table 4の通りである。経験(現在)4因子間、経験(過去)4因子間、経験(現在)と経験(過去)間の相関は、すべての因子の間で有意な正の相関が見られた。

動物観、経験(現在・過去)と性格検査(自己顕示性・共感性・非協調性・攻撃性)、対人不安傾向尺度、孤独感尺度、信頼感尺度との相関についてはTable 5の通りである。

Table 4 動物観、経験(現在・過去)間の相関係数

	親密・一体感	高等感情機能	仲間感・依存感	感覚・原始感情・欲求機能	飼育必要性	下等生物・物体視	世話・深い関与	会話・意識	観察(現在)	独占(現在)	会話・深い関与	世話	観察(過去)	独占(過去)
親密・一体感		.506**	.563**	.252**	.318**	.239**	.463**	.473**	.338**	.343**	.491**	.251**	.182**	.443**
高等感情機能			.412**	.485**	.312**	.052	.245**	.325**	.219**	.107*	.321**	.148**	.145**	.190**
仲間感・依存感				.522**	.503**	.006	.402**	.499**	.347**	.127*	.504**	.443**	.297**	.247*
感覚・原始感情・欲求機能					.340**	-.024	.150**	.263**	.145**	-.101	.239**	.215**	.114**	-.075
飼育必要性						.056	.366**	.337**	.198**	.083	.412**	.356**	.170**	.274**
下等生物・物体視							-.027	-.072	.020	.252**	-.032	-.061	.005	.129*
世話・深い関与								.751**	.491**	.480**	.565**	.412**	.306**	.569**
会話・意識									.500**	.390**	.647**	.361**	.383**	.407**
観察(現在)										.305**	.410**	.338**	.638**	.374**
独占(現在)											.302**	.158**	.165**	.637**
会話・深い関与												.699**	.446**	.550**
世話													.430**	.435**
観察(過去)														.301**

Table 5 動物観、経験(現在・過去)と性格検査(自己顕示性・共感性・非協調性・攻撃性)、対人不安傾向尺度、孤独感尺度、信頼感尺度との相関係数

	自己顕示性	共感性	非協調性	攻撃性	否定的評価懸念	情動的反応性	対人関与の苦痛	共感可能性	個別性への気づき	他人への信頼	自分への信頼	不信
親密・一体感	.102	.167**	.166**	.109**	.104	.088	.113*	.028	.027	-.012	.009	.195**
高等感情機能	-.019	.144**	.105	.115**	.057	.108*	.018	-.050	-.001	.004	.037	.152**
仲間感・依存感	.068	.207**	-.062	-.057	-.010	.013	-.111*	-.163**	-.080	.195**	.153**	-.027
感覚・原始感情・欲求機能	.064	.180**	-.012	-.028	.021	.055	-.093	-.225**	-.034	.169**	.182**	-.013
飼育必要性	-.031	-.017	-.158**	-.083	-.172**	-.054	-.134*	-.117*	-.170**	.146**	.142**	-.145**
下等生物・物体視	.169**	.054	.194**	.074	.138*	.082	.120*	.043	.003	-.051	.037	.096
世話・深い関与	-.066	.008	.031	.058	-.042	.075	.094	.046	.058	-.021	.006	.082
会話・意識	-.003	.129**	-.036	.041	.024	.043	.013	-.049	.050	.117**	.071	.061
観察(現在)	.010	.132**	.049	.039	-.010	.035	-.003	-.026	.080	.070	.064	.106
独占(現在)	.140**	.011	.203**	.185**	.096	.089	.191**	.138*	.065	-.030	-.015	.177**
会話・深い関与	.018	.100	.007	.028	-.018	.040	.017	-.070	-.010	.123*	.094	.086
世話	-.010	.042	-.083	-.081	-.038	.007	-.042	-.064	-.109*	.097	.054	-.005
観察(過去)	-.080	.047	-.049	-.043	-.029	.078	-.002	-.078	-.030	.120*	.101	.017
独占(過去)	.004	-.086	.115**	.058	-.011	.027	.147**	.141**	.006	-.036	-.034	.096



(3)重回帰分析

動物観の6つの因子、親密・一体感、高等感情機能、仲間感・依存感、感覚・原始感情・欲求機能、飼育必要性、下等生物・物体視をそれぞれ目的変数とし、経験(現在)の4因子、経験(過去)の4因子、性格検査の4因子、対人不安傾向の3因子、孤独感の2因子、信頼感3因子、計20因子をそれぞれ説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った(Table 6)。なお、係数は5%水準で有意であった。

親密・一体感では、会話・深い関与、世話・深い関与、非協調性、共感性、独占(過去)が高く、世話(過去)が低い人ほど、ペット動物との親密・一体感を強く持つことが示された。

高等感情機能では、会話・意識、会話・深い関与、不信が高い人ほど、ペット動物に対して高等感情機能を映しやすいことが示された。

仲間感・依存感では、会話・意識、世話(過去)、共感性、自分への信頼が高い人ほど、ペット動物との仲間感・依存感を強く持つことが示された。

感覚・原始感情・欲求機能では、会話・意識、非協調性、世話が高く、独占(現在)、共感可能性、独占(過去)が低い人ほど、ペット動物に対して感覚・原始感情・欲求機能を反映しやすいことが示された。

飼育必要性では、会話・深い関与、世話・深い関与が高く、不信、個別性への気づきが低い人ほど、ペット動物に飼育必要性を強く持つことが示された。

下等生物・物体視では、独占(現在)、非協調性、自己顕示性が高く、会話・意識が低い人ほど、ペット動物に対して下等生物・物体視することが示された。

Table 6 重回帰分析の負荷因子

親密・一体感	(+) 会話・深い関与(過去)[.370]、世話・深い関与(現在)[.209]、非協調性[.148]、共感性[.178]、独占(過去)[.190] (-) 世話(過去)[- .172]
高等感情機能	(+) 会話・意識(現在)[.194]、会話・深い関与(過去)[.180]、不信[.130]
仲間感・依存感	(+) 会話・意識(現在)[.366]、世話(過去)[.296]、共感性[.139]、自分への信頼[.089]
感覚・原始感情・欲求機能	(+) 会話・意識(現在)[.317]、非協調性[.183]、世話(過去)[.207] (-) 独占(現在)[- .141]、共感可能性[-.237]、独占(過去)[- .199]
飼育必要性	(+) 会話・深い関与(過去)[.299]、世話・深い関与(現在)[.212] (-) 不信[-.137]、個別性への気づき[-.125]
下等生物・物体視	(+) 独占(現在)[.273]、非協調性[.122]、自己顕示性[.113] (-) 会話・意識(現在)[- .171]

(4)環境と各因子の平均値の比較

各因子に関して、各群間の平均値の差の有意性を検定するために、2群からなる環境の17項目についてt検定(5%レベル)を行った。結果をTable 7に示す。

考察

因子分析

〈経験(現在・過去)〉

動物との関わり経験について、現在と過去それぞれの経験頻度を質問した。その結果、現在では第1因子より順に、【世話・深い関与】、【会話・意識】、【観察】、【独占】の4因子、過去では順に【会話・深い関与】、【世話】、【観察】、【独占】の4因子が抽出された。

現在と過去で差が見られたのは、「世話」と「会話」の位置づけであった。どちらも一方では「深い関与」と同じ因子に負荷していた。「深い関与」の中には、藤崎(2000)のペット動物に対する「物理的な人格化」や「情動的な巻き込まれ」などの経験項目が含まれていた。そこで、深い関与に至る指標の違いが注目される。現在の経験では、自らがペット動物の世話をするを指標にペット動物に対する見方が変化していると考えられ、過去の経験では、会話することを指標としていることがわかる。子どもにとってペット動物の世話は楽観的な印象に固定してしまいがちである。大西(2006)では、3才児・5才児・7才児を対象に岸本(2001)の動物に対する愛着度を調べた結果、どの年齢においても愛着度が高かった。愛着度の中の項目、「わたしは、動物のためにせわをするのがだいすきだ。」も同様に得点が高かった。しかし、実際のペット動物の世話は継続的なものであり、責任を伴う。これらを踏まえると、子どもはペット動物の世話を楽しいものという意識でしか捉えきれていないと考えられる。以上を考慮に入れると、楽しい外的な経験のみでは深い関与には至らないことが予想される。それに対し、現在では楽しい部分のみではなく責任についても理解しながらペット動物の世話に関わっていると考えられる。全面的に世話をすることによって責任を持って飼育している、つまりより身近な存在として受け入れているのではないだろうか。このような考えから、「深い関与」は現在では「世話」と、過去では「会話」と強い関係性を持つことが説明できる。

【観察】と【独占】は、現在と過去のどちらでも抽出された。【観察】には接触はないが興味や関心があるという項目が負荷していた。写真集やテレビ番組などを見る行為から、動物を嫌いでないことが推測される。また実際に自分が動物園やペット動物を飼育している知人の家に足を運んでいることから、興味関心を含んでいると捉えた。【独占】には「ペット動物に本を読み聞かせること」という項目が負荷した。「本を読み聞かせる」行為は親が子どもに行う行為と対比させ、ペット動物に対しても同じような行為が起こるかどうかを

Table 7 環境と各因子の平均値の比較

動	親密・一体感	(+) 自宅飼育、部屋飼育、学習、病気がち、近所飼育、特別な動物の存在
物	高等感情機能	(+) 学習、特別な動物の存在 (-) 軒家
観	仲間感・依存感	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、一軒家、近所飼育、特別な動物の存在
視	感覚・原始感情・欲求機能	(+) 自宅飼育、外庭飼育、特別な動物の存在 (-) 一人っ子
経	飼育必要性	(+) 自宅飼育、外庭飼育、一軒家、近所飼育、学校飼育、特別な動物の存在
験	下等生物・物体視	(+) 一人っ子 (-) 外庭飼育
(現在)	世話・深い関与	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、一軒家、近所飼育、特別な動物の存在 (-) 都会っ子
(過去)	会話・意識	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、近所飼育、特別な動物の存在
	観察	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、学習、近所飼育、特別な動物の存在
	独占	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、近所飼育、特別な動物の存在
	世話・深い関与	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、近所飼育、特別な動物の存在
	世話	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、一軒家、近所飼育、学校飼育、特別な動物の存在 (-) 都会っ子
	観察	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、学習、近所飼育、特別な動物の存在 (-) 都会っ子
	独占	(+) 自宅飼育、外庭飼育、部屋飼育、近所飼育、特別な動物の存在

見たものである。第4因子に負荷した他の項目には、恋人を独占したいという欲求と対比させた「ペット動物が他の人にかわいがられるのを許せないこと」が含まれた。本を読み聞かせることは自分が上の立場に立っていると想定され、相手の意思の確認がないままに自分の意思のみの行為であるので、この項目も独占と捉えることにした。

#### 相関分析

動物観因子同士の相関は、親密・一体感、高等感情機能、仲間感・依存感、感覚・原始感情・欲求機能、飼育必要性では、それぞれについて正の相関が見られた。しかし、下等生物・物体視については、親密・一体感と正の相関があったものの、他の因子とは相関が見られなかった。下等生物・物体視については親密・一体感とのみ正の相関が見られた。一見真逆に感じられるが、親密・一体感が高くなれば独占欲が強まり、同等の立場に立つというよりは「私の自由にできるもの」として捉えることも多くなるのではないか。よって下等生物・物体視することも多くなると考えられる。

動物観因子と経験(現在・過去)因子の相関では、ほとんどにおいて正の相関が見られ、動物観が高ければ高いほど経験も豊富であると言えた。しかし、下等生物・物体視は経験因子の独占(現在・過去)にのみ相関がみられた。動物観因子同士の部分で述べたように、独占欲が強くなればなるほど下等生物・物体視しやすくなるのがここでも説明出来た。

動物観因子と性格検査(自己顕示性・共感性・非協調性・攻撃性)、対人不安傾向尺度、孤独感尺度、信頼感尺度の相関では、全体を通して、対人関係をペット動物へそのまま映す傾向があるということがわかった。特徴的な部分を挙げる。独占の相関では、独占(現在)が強い人ほど、自己顕示性、非協調性、攻撃性、対人関与の苦痛、共感可能性、不信が高いことが示された。対人関係において自分を中心に考え、苦痛を感じていると、ペット動物に対して自己中心性が助長され、また苦痛の反発から独占欲が強くなっていると考えられる。独占(過去)が強いと非協調性、対人関与の苦痛、共感可能性が高いことが示された。対人関係が否定的であると独占欲が強くなる傾向が、現在・過去のどちらの経験においても現れている。また、親密・一体感が強いと共感性、非協調性、攻撃性が高く、対人関与の苦痛や不信が高いことが示された。対人関係において共感性の高い人はペット動物に対しても同様の傾向があると言えるだろう。しかし、その他の因子は対人関係において否定的であり苦痛を感じているため、これらが強いほど逆に反発のような形でペット動物との親密性や一体感を求める傾向があると考えられる。

#### 重回帰分析

まず、親密・一体感には、会話・深い関与(過去)、世話・深い関与(現在)、非協調性、共感性、独占(過

去)、世話(過去)が影響していることが示された。深い関与が親密性を高め、共感性や独占欲が一体感を強めていると言える。さらに非協調性は、対人関係において出来ないことの裏返しとしてペット動物と親密性や一体感を高めている。

高等感情機能への影響は、会話・意識(現在)、会話・深い関与(過去)、不信があり、動物との会話・意識、深い関与の経験が多く、対人関係に不信を感じやすい人ほど、ペット動物に高等な感情機能を見出しやすいことが示された。会話に着目すると、人間は動物に対して一方的に話しかけるだけではなく、コミュニケーションを図っている。この場合、動物に対してコミュニケーション能力を見出していることになる。これはまさに、高等感情機能に影響を与えていると言える。

仲間感・依存感への影響は、会話・意識(現在)、世話(過去)、共感性、自分への信頼があり、現在の動物との会話・意識経験、過去の世話経験が多く、対人関係において共感性が高く、自分への信頼がある人が、仲間感・依存感を強く感じていることが示された。研究1で動物との関係性として対比させた親密・一体感と比較してみると、世話や会話の要素はどちらにも影響を与えているが、深い関与に関しては仲間感・依存感では見られなかった。また、親密・一体感では対人関係でできない部分をペット動物に映そうとしている裏返しの影響が見られたが、仲間感・依存感では明確なものは見られない。これより、親密・一体感が仲間感・依存感に比べ、ペット動物に向ける意識が強いと言える。よって、研究1の結果と一致する結果となった。

続いて、感覚・原始感情・欲求機能への影響は、会話・意識(現在)、独占(現在・過去)、共感可能性、非協調性、世話(過去)があり、会話・意識、世話などの経験が多く、動物に対する独占欲が弱く、共感可能性が低く、非協調性が高いと感覚・原始感情・欲求機能を見出しやすいことが示された。ここでも豊富な経験が影響しているが、独占に関しては負の影響があった。独占欲が強いということは対象との間に関係性があることが前提とされる。感覚・原始感情・欲求機能は高等感情機能と比較すると、どのような生物に対しても読み取ることが容易である。つまり、ペット動物以外の動物に関しても見出すことが多いと言える。よって、独占していなくても見出すことは容易だということが考えられる。逆に言えば、独占欲が強くなると感覚・原始感情・欲求機能はすでに前提として意識の中に見えにくくなるのかもしれない。

飼育必要性への影響は、会話・深い関与(過去)、不信、世話・深い関与(現在)、個別性への気づきがあり、会話や世話、深い関与の経験が多く、不信、個別性への気づきが低いことが飼育必要性を感じることに関連していることが示された。動物との関わり経験が多いほど、生き物であるという認識を持つことがわかった。



また対人関係において不信を感じている人、個別性に気づきやすい人は、動物に関しても同じような感覚を持ち、人も動物もそれぞれ別の生き物だという認識を持つと言える。よって不信と個別性への気づきは負の影響が出たと考えられる。

下等生物・物体視への影響は、独占(現在)、会話・意識(現在)、非協調性、自己顕示性があり、動物に対し会話や意識をするのではなく、独占的であり、非協調性が高く自己顕示性の強い人がペット動物に対し下等生物や物体だと捉えていることが示された。飼育必要性和比較すると、飼育必要性には深い関与という動物との交わりがあるのに対し、下等生物・物体視には一方的な独占しか見られなかった。交わりを持つということは、対象を心ある存在として捉えていると言い換えられるため、一方的な独占では同様には捉えにくい。よって下等生物のように捉えることは、物扱いと同等であると言える。このことは研究1の結果と一致した結果となった。

#### 平均値の比較

環境が動物観や動物との関わり経験にどのような影響があるのかを知るために、t検定を行った。Table 7より、自宅や近所のペット飼育条件は動物観に大きな影響を与えていることがわかった。経験に関しても同じことが言えた。しかし、高等感情機能への影響はなかった。高等感情機能は、飼育状況という環境では形成されることがわかった。また、自宅で動物を飼ったことがない人、自宅の外庭で動物を飼ったことがない人は下等生物・物体視しやすくなることが示された。飼育経験のない人は動物に対しての愛着が見出しにくいと言える。

次に学校で動物愛護についての学習をした人は、親密・一体感や高等感情機能が高くなることが示された。学校での学習は短期間の触れ合いや、あるいは教科書学習のみであったりする。学習の仕方によって影響は異なるだろうが、良い面ばかりを学習し良いイメージのみが頭に残っているのではないかと考えられる。よって高等な感情を見出し、親密性や一体感を理想としてしまったのではないだろうか。

動物愛護の学習もほとんどの経験に影響している傾向が見られた。動物虐待が多い近年において適切な飼育を行うためにも、動物愛護の学習は必要である。学習によって経験が増えることは適切な効果が得られていると考えてよいのではないだろうか。

学校での動物の飼育経験があると、過去の世話の経験が高くなっていった。しかし学校での飼育経験が現在や、深い関与には影響していないこと、また動物観においても飼育必要性以外には影響がないことから、係の仕事や授業の一環としての作業になってしまっていることが考えられる。単に生きている存在であることの理解を目的としているのであれば、その理解の効果

は得られているかもしれないが、ペット動物の飼育は命を預かること、責任を伴うことであるという理解や、動物とよりよく共生していくことを目的としているならば、学校での動物飼育の教育は見直されるべきかもしれない。

以上より、環境の差は動物観や経験に影響を与えていることが示された。特に身近に動物がいるか否かが大きな影響をもたらしていることが明らかとなった。よって仮説2)は支持された。

#### 総合考察

今回、研究1では動物観、研究2では動物観への影響をさまざまな要因を用いて分析した。ここでは仮説に沿って考察したい。まず研究1の、人間はペット動物に対してどのような視点を持ち、どのような存在として捉えているのかという動物観には、親密・一体感、高等感情機能、仲間感・依存感、感覚・原始感情・欲求機能、飼育必要性、下等生物・物体視の6つの観点があつた。予想された仮説では、関係性において「子ども」と「友だち」は区別されると考えられたが、結果は同じ因子にまとまった。家族であるか他人であるかという区別をしているのではなく、その関係性の深さによつての区別がなされていることが明らかとなった。さらにペット動物の能力の解釈は、感情のレベルによつて区別されていた。高等な感情の中には、榎本(2008)で述べられている自己意識的感情特性と似通った項目が負荷しており、今後注目したい点である。

続いて今回の目的の一つである擬人化について、親密・一体感と高等感情機能に注目して述べる。まず研究2、仮説1)動物との経験が少ない人ほど、動物に対して擬人化しやすい、については、相関と重回帰分析の結果を見ていく。親密・一体感、高等感情機能に関しては、現在と過去の動物との関わり経験のすべてにそれぞれ相関があつた。また、重回帰分析においても経験が影響を与えていることがわかつた。さらには他の動物観においても、それぞれ同様に経験が影響を及ぼしており、経験の少ない人が擬人化を起しやすとは一概には言えない結果であつた。しかし、擬人化とは逆の下等生物・物体視に関しては独占の経験のみが正の相関を示し、重回帰分析でも現在の独占が影響していることが示された。これより、擬人化は経験の有無によつて起こるとは言えず、仮説1)は支持されなかつた。しかし経験の種類によつてはペット動物を下等生物と捉えたり、物体視したりし易くなる、つまり擬人化が起こりにくくなることが示唆されたのではないだろうか。

次に、仮説2)環境の差が動物観に影響を及ぼしているのではないかと、についてである。t検定を行った結果、環境のいくつかの項目が動物観に影響しているこ

とがわかった。よって仮説2)は支持されたと言える。特に動物を飼育している、または飼育できる環境については、飼育できない人との差があった。これより動物との触れ合いを意図的に行うか否かを除いても、身近に動物がいることは動物観に影響を与えていると言える。さらには、学校での動物との関わり経験よりも、家庭や地域の経験が動物観に影響をもたらしやすいことも示された。学校での動物に関する学習の効果に今後注目していかなければならないだろう。

最後に、仮説3)対人関係にマイナスイメージを持つ人ほど、動物を擬人化し、人間の代替としているのではないかと、について述べる。仮説1)と同様に親密・一体感、高等感情機能について結果を見ると、相関の結果ではどちらの因子についてもマイナスイメージの因子と正の相関が多くあった。比較対象として、仲間感・依存感、感覚・原始感情・欲求機能の結果を見ると、マイナスイメージの因子とは負の相関があり、プラスイメージの因子との相関が多く見られた。親密・一体感、高等感情機能は重回帰分析でも非協調性や不信などの因子が影響を与えていた。対人関係でうまくいかない事柄や不安を、裏返しとして、またはその解消法としてペット動物に対して行っていると考えられる。つまり、ペット動物を擬人化し、対人関係に見立てていると説明出来る。これより仮説3)は支持されたと言える。さらに注目したいのは、対人関係のマイナスイメージは親密・一体感、高等感情機能と同じく、下等生物・物体視においても影響を及ぼしているということである。この二つの結果より、対人関係にマイナスイメージを持つ人は、ペット動物に対して擬人化をする、またはそれとは真逆の下等生物視や物体視をするかの両極端になることが示唆されたのではないだろうか。さらに、親密・一体感と下等生物・物体視に影響しているマイナスイメージをそれぞれ比較してみると、攻撃性や対人関与の苦痛などは共通しているが、下等生物・物体視にのみ自己顕示性が影響していた。自分を主張したい、注目を浴びたいという欲求がペット動物に対しても同様に表れ、ペット動物よりも自分を中心に考えることで下等生物視してしまいやすくなるのではないかと考えられる。しかし明確な差はみられていないため、対人関係におけるどのようなマイナスイメージが擬人化と物体視に分けているのかは、今後の課題である。また、マイナスイメージと共に多くの因子に影響を与えていた性格特性は共感性であった。他人に共感できる人はペット動物に対しても同様に共感的な理解を示しているといえ、今後、共感性についてのより詳しい研究が望まれる。

仮説は部分的に支持されたが、明確とは言い難い点がいくつかある。飼育状況や環境の差を細かく条件づけた分析など、今後の課題が残された。

以上、人間とペット動物の関係性について述べたが、

ペット動物側からの真相は明らかではない。しかしペット動物に限って言えば、人間がそのペット動物の命を預かることになる。ペット動物の種類が増え、簡単に飼育条件が整う現代において、人間のペット動物に関する理解や考え方を知ることは今後より一層必要となるのではないだろうか。本研究の結果が今後の人間とペット動物とのよりよい関係性を築くための糸口となれば本望である。種の異なる存在であり言葉の通じない存在であるが、人間と同じ命ある存在であり、どこかでわかり合える、気持ちを通じ合うという意識を大切に、正しい知識でよりよく共生していけることを願ってやまない。

#### 引用文献

- 麻生 武(1992)身ぶりからことばへ：赤ちゃんにみる私たちの起源 新曜社
- 麻生 武(2000)人形に心が生まれるまで：子どもたちの他者理解を育むもの 野生教育を目指して：子どもの社会化から超社会化へ Pp.192-225 新曜社
- Bartsch, K and Wellman, H. M. (1995) Children Talk about the Mind. Oxford: Oxford University Press.
- 榎本さち・米澤好史(2008)自己意識的感情特性尺度作成の試み—他者への自己意識的感情欲求特性、対人場面懸念、帰属特性との関係— 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 58, 29-38
- 藤崎亜由子(2000)人はペット動物の「心」をどのように理解しているのか：犬・猫・小型哺乳類・鳥類の飼い主と飼育経験の無い人への質問紙調査から 人間文化研究科年報, 16, 229-244
- 藤崎亜由子(2002)人はペット動物の「心」をどう理解するか：イヌ・ネコへの言葉かけの分析から 発達心理学研究, 13, 109-121
- 藤崎亜由子(2004)幼児におけるウサギの飼育経験とその心的機能の理解 発達心理学研究, 15, 40-51
- 藤崎亜由子・倉田直美・麻生 武(2007)幼児はロボット犬をどう理解するか：発話型ロボットと行動型ロボットの比較から 発達心理学研究, 18(1), 67-77
- 岸本 渉(2001)動物に対する援助行動における心理的報酬および愛他性動機 対人社会心理学研究, 1, 159-170
- 鯨岡 峻(1997)原始的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房
- Lewis, M. (1993) The emergence of human emotions. In M. Lewis and J. M. Haviland (Eds). Handbook of emotions. 223-235 New York: Guilford Press.
- 中島定彦(1992)動物の「知能」に対する一般学生の評定 基礎心理学研究, 11, 27-30
- 大西奈央(2006)子どもは動物の心をどのように読み取るか—心の理解の発達— 和歌山大学教育学部2005年度卒業論文(未公開)
- Reeves, B., & Nass, C. (1998/2001)人はなぜコンピューターを人間として扱うか：「メディアの等式」の心理学(細馬宏道, 訳) 翔泳社
- 山田弘司(1998)行動生態学と擬人化 動物心理学研究, 48(2) 217-232
- 吉田浩子・川村郁子(1997)動物の「知能」, 「痛覚」, 「人間との関係」に対する一般大学生の評定に関する研究 ヒトと動物の関係学会誌, 2, 74-85